

■清沢 淵 学歴無く、徹底した自由主義の評論家として生き、発言できなくなった戦時下の「外交史」「暗黒日記」で名を残す。

きよさわきよし
帝国議会始 1890 = 長野県北穂高村で、比較的裕福な農家清沢市弥・たけの4男1女の三男に生まれる。

日清戦争始 1894 = 4歳：
Bushidou 1899 = 9歳：

日比谷公園 1903 = 13歳：北穂高村小学校を卒業すると、松本(深志)中学への進学を望むも許されず、東穂高村の井口喜源治が創立間もない(研成義塾)に入る。内村鑑三門下のクリスチャン井口の厳格な人格主義教育に強烈な影響を受け、来校した山室軍平の説教に感激もしている。

日露戦争終 1905 = 15歳：早くも同人雑誌に好んで執筆、_(研成義塾)からは、井口に勧められた北米渡航者が多数出ており、満鉄発足 1906 = 16歳：卒業すると、サンフランシスコで大地震を契機に日本人学童隔離問題の起こるアメリカに向けて渡航、韓国反日暴動 1907 = 17歳：ワシントン州のシアトルに着くと、タコマで病院の清掃夫、デパートの雑役などをしながら、アソシエイト 1908 = 18歳：タコマ高校に入学、この間キリスト教から遠ざかり、大好きな文筆活動で学費を捻出できないかと、大逆事件判決 1911 = 21歳：*シアトルの邦字紙(北米時事)の主筆藤岡鉄雪に手紙して、全てを一人で賄うタコマ支社主任となると、日本人移民排斥運動が高潮になるなか、信濃太郎名の記事は日本人移民間でもたちまち評判になり、

明治天皇没 1912 = 22歳：卒業。ホイットウォース=カレッジで政治経済学を学び、ワシントン大学の聴講生になるなど苦学、大正政変 1913 = 23歳：同郷の有志とともに結成した穂高倶楽部の同人雑誌(新故郷)創刊号に'同胞中著名の文士'と記されるなか、移民男性が妻を迎えるべく一時帰国するための母国観光訪問団の随行通信員として、6年ぶりに一時帰国。早稲田大学に合格するが、学費問題で家族の反対に会い、入学を断念して帰米。_移民体験によって熟知することになったアメリカと日本の関係が、評論活動の原点、目的になるのである。

第一次大戦始 1914 = 24歳：_(北米時事)の主筆松原木公の移動に従い、サンフランシスコの(新世界)に移ると、松原が、'堰を切ったように絶倫の才筆を発揮、記事の配列、見出しの付け方、取材の拡大等すべてに新機軸を開き、在米邦字新聞界に新エポックを樹立した。その筆の早さは他に類をみない'と回想しているほどになり、

21ヶ条要求 1915 = 25歳：移民問題解決すべく、理解あるアメリカの知識人らのインタビューを試みる一方、アメリカの労働者との提携で解決できないかと考えていたところ、渋沢栄一らの提唱で、日米親善のため、この年と翌年訪米し、アメリカ労働総同盟会長から好感をもって迎えられた友愛会の鈴木文治を高く評価。

ロシア革命 1917 = 27歳：

本格政党内閣 1918 = 28歳：_本場日本の著名誌に筆を振るってみたいと、米騒動の最中、帰国。横浜の貿易商(菅川商会)に入り、ベルサール条約 1919 = 29歳：その仕事で渡米してシアトルに行き、帰国。早く筆を振りたいと焦るなか、大暴落 1920 = 30歳：同郷の先輩でシアトル邦人社会出身の衆議院議員の紹介で、旅館の娘井貞と結婚。_松原の紹介で中外商業新報社に移り、アメリカの移民問題の専門家として起用され、不本意ながらも幸福な出発。

原敬首相暗殺 1921 = 31歳：帰郷中徴兵検査に合格し、松本の歩兵連隊に入るも、上官の同情も得て、軽微な脚の故障で、即除隊。水平社結成 1922 = 32歳：_投書欄「青山椒」欄の担当になり、信濃太郎名で、自己主張を展開し、関東大震災 1923 = 33歳：関東大震災で妻子義母義妹を失う悲劇に、大杉栄虐殺事件の衝撃。_通報(外報)部長となる。護憲三派圧勝 1924 = 34歳：_夕刊発行とともに設けられたコラム「自由槍」担当となり、やはり信濃太郎名で、自己主張を展開。朝鮮・満洲・中国旅行し、アメリカの排日移民法の成立に、日米関係を悪化させてはならないと、

治安維持法 1925 = 35歳：_最初の著書「米国の研究」を刊行。客観的にバランスととれたアメリカ理解の必要性を説いている。円本時代始 1926 = 36歳：_横原夫人の教え子源川綾子と再婚直前、_女性の隷従からの叛逆の第三の波「モダンガール」を刊行。満洲における日本の「特殊地位」など、政府の政策を批判する論文を諸雑誌に掲載されるようになり、

金融恐慌 1927 = 37歳：目蒲線の鶴の木に転居。長男瞭誕生。_自由主義的総合紙の東京朝日新聞社に転職して企画部次長となり、また中央公論社長の嶋中雄作と密着して常連執筆者の地位を確立して行く。

共産党事件 1928 = 38歳：「米国の研究」において確立した対米政策と、中国旅行で得た独自の見解を包括的にまとめた「黒潮に聴く」を刊行し、大正デモクラシーの行き詰まるにつれて、主張は内省的傾向を帯び始め、真の充実を迎える。

世界恐慌 1929 = 39歳：{中央公論}に田中義一外交を批判した「愛国心の悲劇」発表。*「自由槍」などのコラムに書いた文章も収録した「自由日本を漁る」を刊行。その中の「甘粕と大杉の対話」に対し、右翼から激しい批判起こり、退社。この頃、清沢の提唱で、{中央公論}の常連執筆者の間に二七会が結成される。フリーランスの評論家として10年ぶりに渡米し、その船中で「転換期の日本」を書き上げ、_移民社会出身の名士として歓迎されるなか、「暗黒の木曜日」とそれに続く大恐慌を現地体験、自らをして社会主義者になったと言わしめ、アメリカを代表する人物とみならずヘンリー・フォードと、イタリアではムッソリーニと会見し、会見記を公開。

海軍軍縮条約 1930 = 40歳：次女英子誕生。_続いて、雑誌{中央公論}の特派員の肩書でロンドン軍縮会議取材。「アメリカを裸体にす」を刊行。この頃、野間清治が買収した{報知新聞}の論説委員となる(以後9年)。

満州事変 1931 = 41歳：_{報知新聞}の北太平洋横断飛行の準備と取材のため渡米中に、飛行は失敗するなか、満州事変が勃発。五一五事件 1932 = 42歳：_記者の大半、マスコミ全てが支持するなか、批判するも、絶対的支援の邦人社会からの風当たり、続いて起きた上海事変では、アメリカの世論の厳しさを目の当たりに帰国。「アメリカは日本と戦はず」、

国際連盟脱退 1933 = 43歳：新渡戸稲造ら、アメリカは日本の満洲政策を理解するはずと、アメリカ行脚を行うも客死。訳書「亜細亜モンロー主義」、_「革命期のアメリカ経済」「非常日本への直言」を刊行する間、{中央公論}に、前年の内田康哉外相の「焦土外交」答弁に対する「内田外相に問ふ」、国際連盟脱退に衝撃を受け、筆鋒の鋭さにおいて屈指の「松岡全権に与ふ」を発表し名声を高めるも、熱狂的支持の新聞の前には空しく、{改造}に「ジャーナリズムの反動性と進歩性」を発表して責任を強く問うようになるとともに、直後に亡くなった吉野作造を悼み、その後継者を自認して、自らのリベラリズムを一層明確に定義するが、

芥川直木賞始 1935 = 45歳：この前後、「激動期に生く」「混迷時代の生活態度」「現代日本論」「世界再分割時代」「時代・生活・思想」を刊行するという凄まじい執筆に加え、中央公論社の全日本巡回講演会の講師、台湾、華南を講演旅行するなどして裕福であり、鶴の木の家も建て増しを重ね豪邸になるが、知識人・学生の評価は低かった。

日中戦争始 1937 = 47歳：「ソ聯の現状とその批判」を刊行。_日中戦争が勃発すると、堪能な語学力を買われてロンドン開催の国際ペン・クラブ世界会議に、日本代表として出席するが、祖国を弁護してしまうばかりで、自ら反対する硬直的・非協調的外交政策のスポークスマン役になってしまう。ブリュッセルで九カ国条約会議取材すると、

健保+総動員 1938 = 48歳：_ロンドンに戻って、吉田茂駐英大使によるイギリスの世論工作に協力して親しくなり、帰国すると、本来のリベラリストに戻って、石橋湛山の東洋経済新報社顧問となり、将来の生活に備えてレストラン銀星に出資。再び本来の対米協調を軸とした外交への転換を訴え、

大政翼賛会 1940 = 50歳：「第二次大戦の研究」を刊行。前年結成された国民美術協会の補助を得て、日本外交年表作成に着手。{改造}に発表した「三選ローズヴェルトの肚」で、_世論の国アメリカを威嚇することの危険を指摘するも、

日米開戦 1941 = 51歳：嶋中雄作が白井晟一に設計を依頼した軽井沢の別荘(嶋中山荘)の美しさに感銘、嶋中の所有地の一角を譲って貰い、白井の設計で自らの別荘を建てている。_ことごとく自らに反する方向へ進み、ついに内閣情報局が各総合雑誌に内示した執筆禁止者名簿に掲載されて、意見の表明が不可能になり、年表作成をベースに、{現代日本文明史}の第三巻として、幕末開国時から日ソ中立条約までを俯瞰する「外交史」、

..... 1942 = 52歳：*その増補改訂版として太平洋戦争開戦までを記す「日本外交史」を刊行して、親友馬場恒吾、芦田均から高く評価されるが、学問的価値だけから見ても、敗戦前に書かれた最高名著であると言える。何とか意見を述べようと「外交家としての大久保利通」を刊行、利通の孫吉田茂に贈って感銘させて、{東洋経済新報}誌上では匿名執筆の形で時事問題をしばしば論じる一方、戦後の資料にと、詳細な「戦争日記」を付け始め、

年金+総武装 1944 = 54歳：三井、三菱、住友ほかあわせて1万円の寄付を受けて、_日本外交史研究所を設立して、外交官の経験談の蒐集などの事業を開始、ダンバートン・オークス会議で討議された国際連合憲章原案をいち早く入手して、

敗戦 1945 = 55歳：「東洋経済新報」誌上に、常任理事国が力を持ちすぎると批判的に紹介するなど、戦後の日本現代史の著述への意欲を示す一方、同誌上に、国民を誤らせた戦争責任を負うべき言論人として激烈に批判する思い切った記事「徳富蘇峰に与ふ」を発表して、敗戦目前に、急性肺炎で、没した。「戦争日記」は、没後「暗黒日記」として刊行され、貴重な現代史の資料として名を残すことになるのは知る由もなく、'理想と教養無く技術だけの教育の失敗'と記し、自らは'我等(自分と馬場恒吾)が評論家でなくて、何人が評論家なりや'と書き残すほど評論家としての誇りを持っていたことが分かるのである。